

萩

Vol 19

ものがたり



## 海を渡った長州砲

ロンドンの大砲、萩に帰る



H5  
N

郡司健

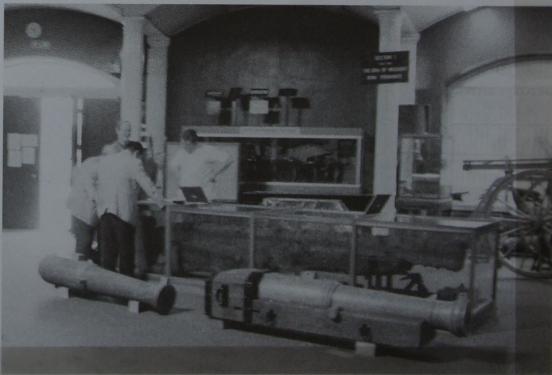
郡司 健著

# 海を渡つた長州砲 —ロンドンの大砲、萩に帰る—

シリーズ  
萩  
ものがたり ⑯



ロタンダ展示場



ロタンダ展示場内の二つの長州砲

## 目 次

はじめに	4
第一章 下関（馬関）戦争	6
(一) 一八六三年の攘夷戦争	6
(二) 四か国連合艦隊攘夷戦争	28
第二章 オランダとパリの長州砲	8
(一) デン・ヘルダー海軍博物館の大砲	12
(二) アムステルダム国立博物館と	12
長州砲（長府砲）	14
(三) アンヴァリッドの長州砲	16
第三章 萩と大砲	20
(一) 二つの铸造所	21
(二) 松本の铸造所	22
(三) 青海の铸造所	24
第四章 ロンドンの大砲	26
(一) ロタンダ展示場訪問	28
(二) 富蔵と喜平治の大砲	30
(三) 天保十五年砲（和式大砲）の特徴	32
(四) 砲尾のネジ	35
(五) 萩野流一貫目青銅砲	36
(六) 王立大砲博物館とアームストロング砲	38
第五章 その後のロンドンの大砲	40
(一) ロンドン再訪	40
(二) ファイアパワー	45
第六章 「ドラゴン—東洋の大砲」展	48
海を渡つた大砲の意義	48

## はじめに

一八六三年および一八六四年に、長州藩は、下関でオランダ・フランス・イギリス・アメリカ四か国と戦いました。これは江戸幕府の攘夷決行の布告に従つて、下関海峡を通過する外国艦船を打ち払うものでした。この戦いは、馬關戦争ないし下関戦争と呼ばれましたが、とくに元治元年（一八六四）の戦いは、四か国の連合艦隊が下関の砲台を攻撃してきたところから、四か国連合艦隊攘夷戦争とも呼ばれます。同じ時期（一八六三年）に薩摩藩もイギリス艦隊と鹿児島湾で交戦しました（薩英戦争）。

ところで、そのとき下関の各砲台に配置された大砲はすべて連合国に戰利品として没収され、各国に持ち帰られました。パリとロンドン、ワシントンに大砲が残されていることについては、永年、長州砲を探求してこられた直木賀作家古川蔥氏が発見され、「幕末長州藩の攘夷戦争—歐米連合艦隊の来襲」（右平次）信安の大砲がフランスやイギリスにあることはすでに古川氏が突き止められ、下関市の長府博物館には喜平治の荻野流一貫目青銅砲がフランス政府の好意によつて長期貸与されていることは良く知られていました。

オランダに没収された大砲については、永い間、不明のままでした。二〇〇〇年に古川氏が大砲のありかを突き止められ、オランダ製の六分儀を贈呈されたという新聞記事が載つていました。

二〇〇三年にオランダ人ジャーナリストで友人のマルセル・レメンズ氏一家がオランダに帰国したのをきっかけに、彼と相談してオランダにあるかもしれない長州砲を探すことにしました。ひょっとして幕末に最も活躍した砲術家郡司千左衛門（覚之進）の造つた八〇ポンド西洋式大砲を見つけられるかもしれません」という期待がありました。

二人でいろいろ探した結果、オランダにはデン・ヘルダーの海軍博物館とアムステルダムの国立博物館に大砲とその砲身一部とがそれぞれ存在することがわかりました。そこで、二〇〇四年八月にオランダの二つの博物館と、アンヴァリッドと呼ばれるパリの軍事博物館を訪れました。そして、翌二〇〇五年七月にはロンドンの王立大砲（兵器）博物館のロタンダ展示場（旧ロタンダ大砲博物館）を訪問しました。

## 第一章 下関（馬關）戦争

### （二）一八六三年の攘夷戦争

江戸初期からの永い鎖国その後、十九世紀に入ると、ロシアやヨーロッパ列強の艦船が日本沿岸に頻繁に出没するようになり、国防意識が高まつてきました。嘉永六年（一八五三）六月——西暦（陽曆）の七月、以下、当時の陰曆を使用——には、マシュー・カルブレス・ペリー提督の率いる米国艦隊（黒船）が浦賀に来航しました。幕府はまた、長州藩に対し相模警護を命じました。長州藩では、この相模警護のために多くの西洋式大砲を江戸藩邸でも製造しました。文久元年（一八六一）一月にロシア軍艦が対馬に来航しました（対馬事件）。

文久三年（一八六三）にはオランダやフランスの軍艦が下関を通過し、あるいは寄港するようになります。全国的に攘夷の気分が強まり、四月二十日に幕府は攘夷決行の日を五月十日と定め、各藩に布告。長州藩もまたこれに応えて下関や萩に砲台を築き、保有する大砲と兵力をそこに結集しました。

藩の上層部は必ずしも実力行使に積極的ではありませんでしたが、久坂玄瑞の率いる過激派は、攘夷決行の日の深夜から、下関沖を航行中のアメリカ商船ペンブローク号を軍艦（庚申・癸亥）二隻で砲撃しました。

した。

藩は、その一方で、五月十一日に、井上聞多（志道聞多、後の井上馨）・伊藤俊輔（後の博文）・野村弥吉（井上勝）・遠藤謹助の五人（長州ファイブ（長州五傑））を密かに英國（ロンドン大学）に留学させています。同日藩はまた、武具方検使役から砲兵教授方となつた大組大筒打郡司武之助を正木市太郎他の砲術家とともに、下関に派遣します。武之助等は、海峡一帯の地区を検分し、前田の地を選んで砲台（台場）を起工しました。この時期に、七つの砲台に計五七門、野砲数一〇門が配置されました。

砲台——壇ノ浦（長砲七、白砲二）、弟子侍（荻野流長砲七）、龜山社（長砲四）、杉谷（白砲一、忽砲一）、前田（長砲五）、専念寺（長砲二）、細江（白砲一）

軍艦——丙辰丸、庚申丸（長砲八）、壬戌丸（小砲二）、癸亥丸（長砲一〇）

（注）ここで、臼砲はモルチール砲ともいわれ、臼型をした大砲です。長砲は、カノン砲（加農砲）ともいわれ、長い砲身の大砲です。忽砲は、ホーリスル砲とも呼ばれ、白砲よりも砲身が長いが、長砲ほど長くない大砲です。

その後、六月一日にはアメリカ軍艦ワイオミング号が来襲し、長州藩の軍艦（庚申・癸亥）一隻を撃沈。六月五日には、フランス軍艦セミラミー号とタンクレード号が来襲。一時間余り交戦し、前田砲台と杉谷砲台を破壊し横浜へ去りました。

同年七月二日には薩摩と英國艦隊との間で戦争（薩英戦争）が起きています。薩摩藩は、この戦争によ

り、攘夷から開国へと方針を転換するようになります。同藩もまた、藩士を英國（ロンドン大学）に留学させるのです。

この後、長州藩では今後予想される歐米列強の大攻撃に備えて、藩内の梵鐘・銅器類を集め、砲術師範家の千左衛門を中心に小郡福田や萩沖原の鋳砲所等でも大砲の増産に懸命にとりかかります。また、高杉晋作を中心に、武士だけでなく庶民も参加して奇兵隊が編成されました。奇兵隊とその後に結成された各種の諸隊が、その後の長州藩の主戦力となります。

## （二）四か国連合艦隊攘夷戦争——八六四年——

翌元治元年（一八六四）六月英國公使のラザフォード・オールコックの提唱によりイギリス・フランス・オランダ・アメリカの四か国連合が結成されました。攘夷戦のことを知った伊藤俊輔と井上聞多は、急ぎよ英國から帰国し、直ちに戦争回避の工作を開始しました。七月十九日に長州藩は「蛤御門の変」で敗退。七月二十五日幕府は第一次長州征伐令（征長令）を発しました。長州藩は、攘夷戦再開の脅威に加え、国内的にも孤立しました。

伊藤と井上は、オールコックを説得し、藩政府も講和に最終的に同意しましたが、英蘭仏米の四か国連合艦隊はこれを拒否し、八月五日に、軍艦イギリス九隻、オランダ四隻、フランス三隻の計一六隻とアメ

リカ商船一隻との計一七隻で下関を襲撃しました。

連合艦隊の総合戦力は大砲二八八門・兵員五千余人（水兵三千人、陸兵二千人）でした。これに対し下関側は、正規の長州・長府藩兵、奇兵隊・諸隊あわせて二千人程度です。各砲台とその大砲については、つぎのとおりです。

砲台——前田上・下（八〇ポンド、一四ポンド、一八ポンド砲等二〇門）、壇ノ浦（三〇ポンド砲等一四門）、弟子待（荻野流大砲七門）、洲崎（一五〇ポンド臼砲以下九門）、その他約七〇門  
とくに主力の前田砲台と壇ノ浦砲台は、奇兵隊・諸隊あわせて六〇〇人が守備。彦島の弟子待砲台には、前年と同様、荻野流の和式大砲が七門配備されていた。彦島（弟子待・洲崎砲台）には荻野流砲術の指導を受けた荻野隊三〇〇人と長府藩士二六〇人などが守備していました。  
連合艦隊は、前田・壇ノ浦砲台を集中的に攻撃し、それは八日まで続き、正午過ぎに休戦しました。  
全砲台で何門の大砲が配されたかは、いろいろな説がありますが、アーネスト・サトウの「外交官の見た明治維新」によれば、一〇九門が没収されることになります。戦闘中に破壊されあるいは破棄されたものも含めれば、一二〇門近く配備されていたことは間違いないでしょう。

八月十四日に長州藩は高杉晋作を代表として連合艦隊と講和条約を締結しました。この時の高杉晋作の活躍は非常に重要です。彼は、下関戦争の前年つまり文久二年（一八六二）に上海を視察し歐米列強による中國侵略の実情を目のあたりにしています。そして、下関戦争の講和談判では下関さらには兵庫の開港



下関会戦図—アムステルダム国立博物館所蔵



THE LOWER BATTLE AT SHIMODA AFTER THE BATTLE.—FROM A SKETCH BY OUR OFFICIAL ARTIST—OUR BOY PAGE.  
I L N (イラストレイティド・ロンドン・ニュース)  
1864年12月24日付記事

をなんとか回避したのでした。

こうして、下関戦争および薩英戦争によって苦い敗北を経験した長州・薩摩の両藩は、これを契機として、攘夷から開国へ実質的に方向転換を行うことになります。これらの攘夷戦争こそは、まさに日本が本格的に国際化に乗り出した転換点となり、その後の明治維新への大転換の起点となる出来事でした。

この戦争により、長州藩（萩藩・長府藩）がこの戦争のために配備した大砲の多くが、イギリス・フランス・オランダ・アメリカにより戦利品として没収され、持ち去られたのです。

## 第二章 オランダとパリの長州砲

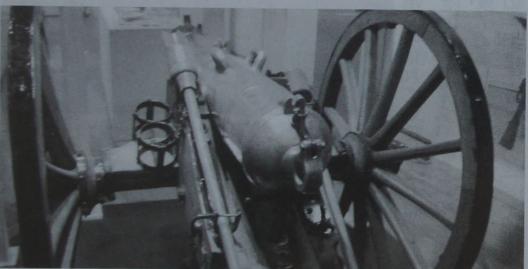
### (一) デン・ヘルダー海軍博物館の大砲

オランダの半島突端にある軍港都市デン・ヘルダーは、アムステルダムから電車で約一時間のところにあります。海軍博物館の展示館の横には潜水艦が置かれ、見学できるようになっています。二階の歴史展示場には、「1863年 下関」のコーナーが設けられ、下関砲として砲架に乗せられた大砲が展示されています。そして、その説明文によれば、この大砲は、ドイツのクルップ社製と推測されるが、砲架の方は長州製であり、その車輪の鉄枠（轍）には「よしかね（Yosikane）」という名前が刻まれていたとのことです。また、砲耳には「26」という算用数字（アラビア数字）が刻まれています。

クルップ社は、一八一年にドイツのエッセンに製鋼所として設立され、鉄道関係機械の製造からさらに兵器製造に着手し、たちまちのうちに大型の鋳造銅砲を製造するようになりました。その銅鉄製の大砲は、欧州において高く評価され、イギリスのアームストロング社とともに世界で最も有名な大砲製造の会社となります。ただし、デン・ヘルダーの大砲がクルップ砲であるとは断定されているわけではありません。長州砲（日本製）である可能性も捨てきません。



デン・ヘルダー海軍博物館展示場入口



下関砲と砲架



砲耳の「26」



アムステルダム国立博物館



長府砲の砲身の一部

「三星紋」に関しては、本藩の萩藩は筆記体による「文字」を用いるのに対し、支藩の長府藩（府中藩）は長方形の一文字を用いていました。地下倉庫に納められた砲身の断片は、まぎれもなく長府藩の铸造になるものです。このような切断された形で残されたことは大変残念ですが、それでもこの銀象嵌にはこれを造った鎔物師の心が伝わってくるような感動を覚えます。

## （二）アムステルダム国立博物館と長州砲（長府砲）

翌日は、アムステルダムの国立博物館を訪れました。その際に学生員のニコラスさんからいろいろお話をうかがいました。古川氏が贈呈されたオランダ製「六分儀」について国立博物館は非常に感謝されました。

同博物館所蔵の長州砲を拝見するために、私たちは、地下二階にエレベータで降りました。その貯蔵庫には砲身に填め込まれた「一文字二星紋」の銀象嵌の部分のみ切断されて残された大砲の一部が、手押し車の上に無造作におかれています。「一文字二星紋」の銀象嵌は、筆記体ではなく、幾何学的な形をしていました。

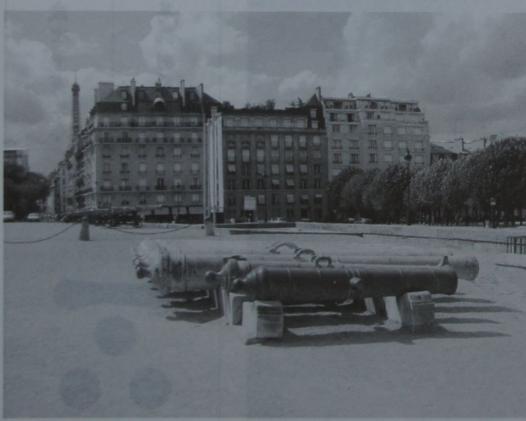
この大砲の断片に関する説明文は、ニコラスさんからあらかじめメールで送つて頂いていましたが、次のように書かれていました。

「この紋章は、三つの太陽（恒星）とその上に一の数の表象からなる。この紋章（紋）は『長門星』（Nagaoiboshi）すなわち長門の星と呼ばれている。それは、長門の國の大名で、萩の町に住む毛利家の第一家紋として用いられている。この紋章はまた、（長門の一地方である）府中・毛利家と、同じ地方面の清末・毛利家によって使用されていた。」

毛利家の家紋については儀礼用の「沢瀉」紋とこの「一文字二星紋」があります。しかもその「一文字



アンヴァリッドの長州砲



左上の奥にエッフェル塔が見える

### (三) アンヴァリッドの長州砲

一路オランダをあとにして、次の日には飛行機でパリへ着き、直ちにアンヴァリッドへ向かいました。アンヴァリッドはセーヌ河畔にあり、エッフェル塔や凱旋門からそこ遠くない、パリの中心部の閑静な場所に位置しています。すぐ横にはロダン美術館があります。アンヴァリッドは廃兵院とも軍事博物館とも称されますが、その南門側にはナポレオンの棺の置かれたドームがあります。

セーヌ川寄りのアンヴァリッドの北門を入って、すぐのところに左右それぞれ一〇門の大砲がおかれています。向かって右側（西側）のエッフェル塔側にある大砲群の中に長州砲はありました。一番手前の大砲は、中国製の青銅砲で、その次の大砲が長州砲です。その右側にはトルコの大砲が八門並べて置かれていました。

この大砲の砲身には、砲の先から、「十八封度砲」（十八ポンド砲）、つぎに中間部分の右側には「嘉永七歳次甲寅季春」（嘉永七年の春に）、左側には「江戸葛飾別墅鑄之」（江戸葛飾の別墅でこれを鋳造した）という文字が、腐食が進み断片的にではあるが、判読できます。そして手前の砲尾には長州藩・毛利家の家紋「一文字三星」が刻まれていました。この大砲は、もともとペリー提督が浦賀に来航した翌年の嘉永七年（一八五四）に、長州藩が相模警護のため、江戸葛飾砂村の藩別邸で佐久間象山の指導のもと、郡司喜平治（右平次）信安に作らせた三六門のうちの一門です。

第三章 大砲

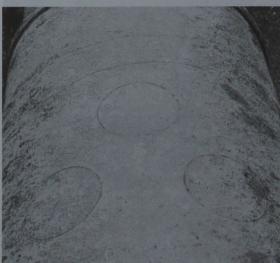
古川薫氏によればアンヴァリッドには、以前、長州砲が二門保管されていたそうです。嘉永七年（一八五四年）砲と同じ大砲がもう一門と、郡司喜平治が天保十五年（一八四四年）に造った荻野流の大砲（荻野一貫目青銅砲）が一門です。天保十五年砲は、当時の安倍晋太郎外務大臣の尽力とフランス政府の厚意により現在長府博物館に長期貸与されています。他方、もう一門あるはずの西洋式大砲は、今回フランス・オルレアン大学のアラン・フルーリ教授にいろいろ調べてもらいましたがついにわからぬままでした。



左から中国砲、長州砲、トルコ砲



セーヌを臨む



一文字三星紋

十八封度砲

於江戸葛飾別墅鑄之

嘉永七歳次甲寅季春



### 第三章 萩と大砲

一〇〇五年四月に、当時、大手前大学大学院教授だった松本昌家先生がウリッジの王立大砲博物館を訪れた際、郡司喜平治信安と郡司富蔵信成の名前が刻まれた日本の大砲を見てこられたという話を聞きました。松村先生は英國ヴィクトリア朝文化研究の権威であり、一八六二年の第二回ロンドン万博において幕末遣欧使節団が非常に関心を示した、アームストロング砲について調べるために同博物館を訪問されたのです。

松村先生の話に筆者は大変驚きました。喜平治（右平次）信安は、当時、松本の铸造所の当主であり、富蔵信成は青海の铸造所の当主でした。富蔵信成は、筆者の曾々祖父にあたります。青海の方は、幕末にはもはや大砲は造っていないなど、当時は思っていたのです。

その後、萩の幕末長州科学技術史研究会 樹下明紀会長、以下、「幕長研」と略称 幹事の藤田洪太郎氏（萩ガラス工房社長）から『新・史都萩』（創刊号）を送っていました。そこには古川さんがロンドンには喜平治の大砲だけでなく、富蔵の大砲もあったことが書かれてありました。富蔵の大砲の存在がより一層実感を伴つものとなつたのです。

#### (一) 二つの铸造所

喜平治と富蔵の一族は、代々、大内氏に仕え、中村若狭守隆安（隆康）から隆安流砲術を受け継ぐとともに、参内铸造師として洪鐘・仏具等の铸造だけでなく大砲の铸造にも携わっていました。大内氏の滅亡後は、毛利家に仕えました。毛利氏が萩に開府して後、郡司讀岐信久とともにその八人の子がそれぞれ萩に召し抱えられました。その後、砲術家（大組大筒打・遠近大筒打、御陸士）五家と大砲铸造家つまり鎧砲家（細工人）二家とに分かれ、おもに大砲の运用（砲術）と制造（鎧砲）に携わってきました。铸造家二家は同時に防長二州の铸造師の総代を務め、大砲だけでなく、梵鐘や仏像、神社・仏閣の铜製品から藩札の原版、秤りの分銅、鋤・鍬、鍋釜といった日常の生活用品まで造っていました。

讀岐信久は、『古事類苑』（武技部十六「大砲術」）に記されているように、大砲铸造・砲術の名人であるとともに、名鐘も現在に残しています。彼は松本の铸造所をまず開き、その後、椿の青海に铸造所を開きました。松本の铸造所は、三男の喜兵衛信安に譲りました。

松本の铸造所は、萩東郊の松陰神社の近く、つまり、かつて松下村塾のあった同じ松本村に位置し、現在はその遺構が再現されて公園となっています。青海の铸造所は、萩城の南（萩駅の西南）、毛利家の菩提寺大照院の近くに位置しています。



出雲大社銅鳥居



宮島の厳島神社燈籠

同じ和流一貫目砲一六門はじめ多くの大砲を造るようになりました。ペリー提督が来航した嘉永六年（一八五三）十一月、松本の鋳造所は藩營となり、右平次（喜平治）は、大組の郡司武之助とともに大砲鋳造用掛となり、姥倉の鋳砲所の用掛も兼務します。その年末には江戸に上り、長州藩砂村別邸で佐久間象山の指導のもとに、西洋式一八ポンド砲を造ります。このほかにも八〇ポンド砲や二四ポンド砲といった巨砲も造っています。これらを含めて、彼は、一生のうちに一三〇門の大砲を造つたといいう名人です。その功績により元治元年（一八六四）には無給通となり、喜兵衛信英以来の念願をついに達成します。

讃岐信久の三男喜兵衛信安は、大砲（大筒）に新たな工夫を加え多くの大砲を鋳造するとともに、出雲大社の銅鳥居（寛文六年（一六六六））や萩市端坊の洪鐘等を鋳造した名人です。喜兵衛信安は、元禄十二年（一六九九）に、その功績によって無給通（土分）となり、嫡子源太夫信久は父の跡を継ぎ、のち大組大筒打となります。そこで、權助信正を養子として松本の鋳造所を継がせました。權助信正もまた、その功績により大筒打となつたので、讃岐の八男五郎左衛門家の喜兵衛信英を養子にして家職を継がせました。このように松本の鋳造所の方は、職業に精励し、大砲鋳造の功により一代細工人（準士）となつて家業を続けることができますが、それ以上に出世して無給通、遠近付、大組等の土分に取り立てられると、これまでの職は免じられ、家業（鋳造）の方はできなくなります。そこで、親戚のものを養子にして家職を継がせました。

先の喜兵衛信英やその子七兵衛信向・孫喜兵衛信定もそれぞれ松本鋳造所を継ぐとともに、土分にお取立を願い出ますが、その許可のないうちに病没しました。七兵衛信向の作品としては、広島県宮島の厳島神社の燈籠が残っています。

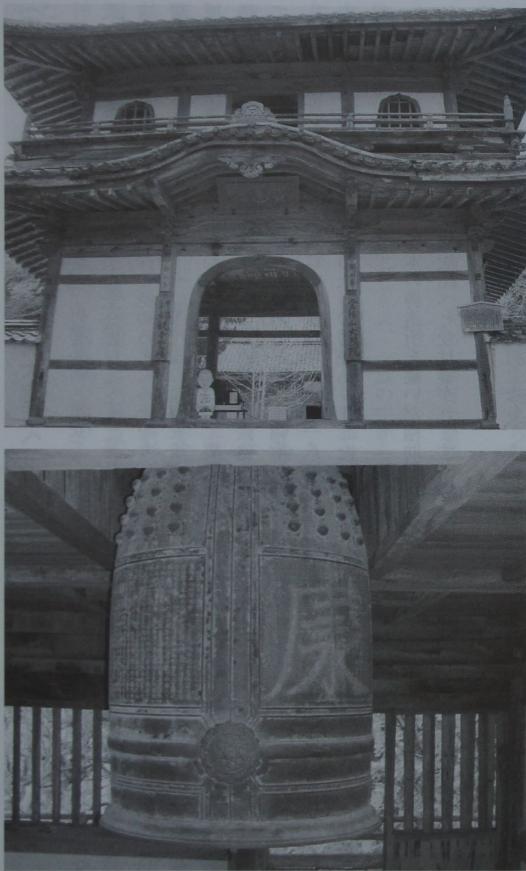
喜兵衛信定の後を喜平治信安（のち右平次）が継ぎました。彼は、文政六年（一八三三）に防長第一といわれる天樹院の大鐘の鋳造を手始めに、様々な銅製品を鋳造し、天保十五年頃には、ロンドンの大砲と

## （二）松本の鋳造所

讃岐信久の三男喜兵衛信安は、大砲（大筒）に新たな工夫を加え多くの大砲を鋳造するとともに、出雲大社の銅鳥居（寛文六年（一六六六））や萩市端坊の洪鐘等を鋳造した名人です。喜兵衛信安は、元禄十二年（一六九九）に、その功績によって無給通（土分）となり、嫡子源太夫信久は父の跡を継ぎ、のち大組大筒打となります。そこで、權助信正を養子として松本の鋳造所を継がせました。權助信正もまた、その功績により大筒打となつたので、讃岐の八男五郎左衛門家の喜兵衛信英を養子にして家職を継がせました。このように松本の鋳造所の方は、職業に精励し、大砲鋳造の功により一代細工人（準士）となつて家業を続けることができますが、それ以上に出世して無給通、遠近付、大組等の土分に取り立てられると、これまでの職は免じられ、家業（鋳造）の方はできなくなります。そこで、親戚のものを養子にして家職を継がせました。

先の喜兵衛信英やその子七兵衛信向・孫喜兵衛信定もそれぞれ松本鋳造所を継ぐとともに、土分にお取立を願い出ますが、その許可のないうちに病没しました。七兵衛信向の作品としては、広島県宮島の厳島神社の燈籠が残っています。

喜兵衛信定の後を喜平治信安（のち右平次）が継ぎました。彼は、文政六年（一八三三）に防長第一といわれる天樹院の大鐘の鋳造を手始めに、様々な銅製品を鋳造し、天保十五年頃には、ロンドンの大砲と



毛利家菩提寺大照院鐘樓門と洪鐘—四郎左衛門信房作

### (三) 青海の铸造所

他方、青海の铸造所の方は、四男基之允・七男長左衛門を経て、讃岐の長男権之允の孫にあたる四郎左衛門信房が跡を継ぎました。長左衛門は四郎左衛門の砲術稽古のために元禄十五年（一七〇三）に一貫目玉の大砲一門を自費で作り公儀に召し上げられています。

四郎左衛門信房は、松本の喜兵衛信英とともに一貫目砲だけでなく当時最も大きな五貫目玉大砲（四一・三ポンド砲に相当）を造つたり、毛利家の菩提寺大照院鐘樓門の洪鐘も铸造（再鋳）しています。ちなみに、その後、松本の喜兵衛信英は、一〇貫目玉砲（八一・五ポンド砲に相当）を造つています。四郎左衛門は、実子彌八郎（喜之）を御陸士の権六家（讃岐の五男）の養子として跡を継がせ、甥にあたる彌三太（長男権之允系）を養子とし、青海の铸造所を継がせました。青海の郡司が讃岐直系といわれる由縁でしょう。

このように青海の铸造所は、結果的に長男権之丞の系統が継承します。こちらは、代々世襲の細工人として家業を継承するようになつていきました。富蔵にはロンドンの天保十五年砲の他に、東光寺の半鐘、萬壽寺の洪鐘（父彌三郎信貴と共作）といった作品が記録として残されています。

#### (四) 砲術五家—隆安流から西洋流大砲術へ

砲術家は五家に分かれますが、三男喜兵衛（信安）の嫡子源太夫（信之）の系統（源太左衛門、源之助、武之助（賢道））がその筆頭（大組大筒打）です。喜兵衛（信安）の嫡子源太夫信之の砲術は、当時將軍吉宗公の信任厚かつた荻生徂徠の認めるところとなり、享保九年（一七二四）には「郡司火技序」という讚書きえられています。また、その四代後の砲術家筆頭源之助（光孚）は、天保十二年（一八四二）徳丸原で西洋砲術の演武をおこなった高島秋帆について栗屋翁助・井上與四郎とともに入門し、洋式大砲の铸造に着手するとともに、西洋銃陣つまり西洋式の鉄砲・大砲を中心とする陣構え（戦法）について建議しています。これ以後、砲術家五家はおもに西洋流砲術へ移行します。

讃岐の次女おかつの孫貞八は、享保三年（一七一八）唐船の赤間関漂流につき大筒役御雇となり、以後赤間関六連島遠見兼役等を勤め永年の功がありました。この貞八家（遠近付大筒打）から幕末に活躍した覚之進（千左衛門）が出ます。

三男喜兵衛の養子として松本の铸造所を継いだ権助信正（次男木工允の孫）も大筒打として召し抱えられ権兵衛信智、権助義智、熊次郎へと受け継がれます。熊次郎の兄、武之助（賢道）は源之助の養子となります。

権助信正の弟、権兵衛（信勝）も大筒打となり、この家から後に十左衛門・次郎左衛門が出てきます。

讃岐の五男權八の系統は御陸士として召し抱えられ、青海郡司の四郎左衛門（信房）の子彌八郎が跡を継ぎました。

このように、砲術家五家の方は、大組大筒打を筆頭として、遠近付大筒打が三家、御陸士一家からなります。

幕末期に、藩は、他の藩士とともに、一族の中から源之助だけでなく、覚之進（千左衛門）や熊次郎らの砲術家を数度長崎に派遣して、西洋流砲術を学ばせていました。それとともに和式大砲の改良だけでなく洋式大砲の铸造にも着手します。

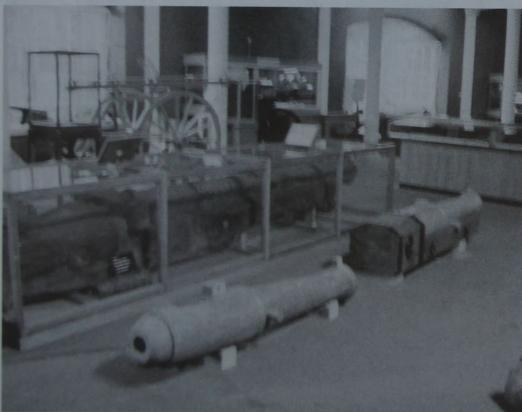
覚之進は松陰吉田寅次郎と同年輩で、長崎で知り合い、江戸でも親交がありました。このことは、司馬遼太郎氏の「世に棲む日日」や「吉田松陰書簡集」（弘瀬豊編）等に見られます。

千左衛門はまた、吉田松陰、高杉晋作等とともに佐久間象山に入門し、西洋流砲術を学びました。安政五年（一八五八）には千左衛門は、長崎海軍伝習所へ派遣され、勝海舟からも西洋銃陣を学んでおりまます。彼は、安政七年（万延元年、一八六〇）一月には高杉晋作（蒸氣科）等と幕府海軍所に入り、その後山口明倫館砲兵塾教授となります。この時期に萩の沖原や山口（小郡福田）の铸造所で、千左衛門を中心に、洋式大砲の铸造に着手しています。下関戦争で用いられた八〇ポンド西洋式大砲の多くは千左衛門の造つた大砲とみられています。

（注）都司家略系図（五四見）を参照。



王立大砲博物館・ロタンダ展示場



展示場入口の和式大砲

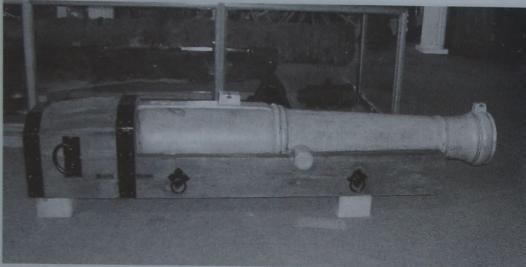
## 第四章 ロンドンの大砲

### (一) ロタンダ展示場訪問

二〇〇五年七月、ちょうど二度目の爆弾テロ事件のあつた直後に、英国での学会出張中の松村先生とロンドンで落ち合い、先生の御案内で、ウリッジを訪れました。ウリッジはグリニッジのさらに東に位置しています。ラッセル・スクエアから金融の中心街シティを通り、ロンドン塔を横に見ながら橋を渡つてテムズ川の南岸をさらに東に進み、グリニッジを経て、ウリッジへ至ります。ロタンダ展示場は、王立大砲博物館の広大な敷地のなかの小高い丘の上に建てられています。

この展示場は円錐形の屋根と円筒型のホールからなっていますが、この円形状の建物のことをロタンダと呼びます。そこで、当時、王立大砲博物館の研究員だったマシュー・バック氏とヴィクトリア&アルバート博物館のネイル・カールトン氏がわれわれを迎えてくれました。

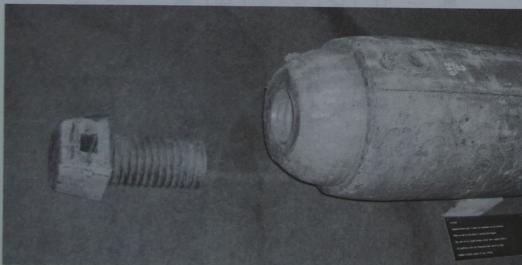
喜平治と富蔵の大砲は、その展示場に入つてすぐの所に一列に並んで置かれていました。



富蔵信成作



喜平治信安作

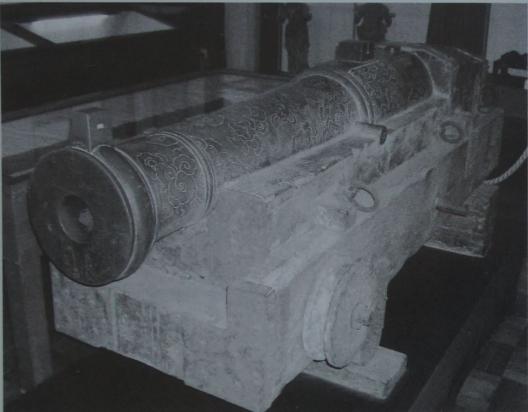


砲尾のネジ

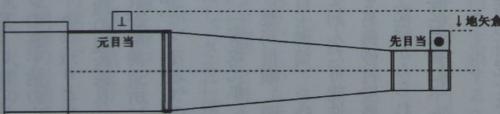
## (二) 富蔵と喜平治の大砲

喜平治の大砲は砲尾のネジがはずされたままの形で床の上に一本の枕木の上に乗せられていきました。富蔵の大砲は、木箱（砲匡）に搭載されていました。これは、長府博物館の喜平治の大砲と同様の形をしています。バック氏によれば、この砲架（砲匡）は後に造りなおしたものですが、桟金は当時のものをペンキ塗りしたものだそうです。富蔵と喜平治の大砲の横には、それぞれ次のような英文の説明プレートが置かれていました。

「分類一二四八 日本の青銅砲。鉄枠の台車に乗せられている。口径は三・四七インチ（約八・八一cm）。この大砲は他の大砲とともに、一八六四年に下関海峡を防衛する日本の砲台から没収した。」（富蔵）  
 「一二四九 日本の青銅砲。それは補強板の上に字が刻まれ、砲身にも同様に龍が彫刻されている。その着火器は円筒の當て金の中にあり、補強板の上の十文字の切り込みを持つ四角いブロックは、照準の役割を果たす。口径は三・四七インチ、砲長は、七三・二インチ（約一八五・九cm）である。」（喜平治）  
 富蔵の大砲の後目当（砲尾の照準器）と着火器との間には、「一貫目玉」「試薬五百目」「地矢倉九歩」と刻まれ、その横には、「天保十五年甲辰 郡司 富蔵信成作」そして、後目当の前には「子貳十四（二十四番）と刻まれていました。同様に、喜平治の大砲には、「一貫目玉」「試薬五百目」「地矢倉一寸一分」、「天保十五年甲辰 郡司 喜平治信安 作」「子四番」と銘が刻まれていました。



長府博物館蔵—荻野流一貫目青銅砲



地矢倉—中本論文、49頁参照

### (三) 天保十五年砲（和式大砲）の特徴

ところで、富蔵と喜平治の大砲の銘の中で「一貫目玉」、「試薬五百目」は、両者に共通し、「地矢倉」「子」の番号に関しては富蔵が「九歩」「子二十四番」、喜平治が「一寸一分」「子四番」と刻まれています。これに対し、長府博物館で「荻野流一貫目青銅砲」として展示されている喜平治の大砲は、「一貫目玉」、「試薬五百目」、「七分」、「子九番」と刻まれています。いずれも雲龍の彫り物が施されています。

製作者	地矢倉	製作番号
富蔵	九歩（約一・七七cm）	子二十四番
喜平治	一寸一分（約三・三三三cm）	子四番
喜平治（長府博物館）	七分（約一・二四cm）	子九番

この三門の天保十五年砲つまり荻野流一貫目青銅砲の銘については右の表のように対比されます。下関在住の郷土史家・中本静曉氏の研究によると、「一貫目玉」は一貫目（三・七五kg・約八ポンド）の実弾（鉛弾・直徑八・五八cm）を意味する。「試薬五百目」は、薬量（発射薬の質量）を意味し、一貫目玉の弾丸に対し約半分の重さの弾薬を要することを意味しています。

「地矢倉」とは、元目当（手元の照準）と先目当（砲先の照準）との砲身の中心線からの距離の差を意味します。この差が大きいほど砲の先が細くなります。事実、ロンドンの喜平治の大砲は、長府博物館の大砲や富蔵の大砲と比べて砲先に行くほど細くなり、いわばよりスマートな造りとなっています。

喜平治の大砲の「子四番」「子九番」、富蔵の「子二十四番」は、大砲の製作番号と推測されています。ただし、この番号がそれぞれ個人別の番号とは考えにくいでですが、それが両铸造所による「一貫目」砲全體の製作番号なのか、あるいはいずれも松本の铸造所で作られたものか、それとも青海の铸造所と別々に作られたものは明らかではありません。

この点に関して、萩博物館の展示パネルには、青海铸造所について、「安政元年（一八五四）にはここでも青銅製大砲を铸造していたと思われる」と書かれています。また、郡司信順（源太左衛門）著『御筒数』にも椿（すなわち青海）でも寛政四年（一七九二）に大砲（一貫目玉御筒）を作ったとする記録があります。それぞれの铸造所で、別々に作って、藩に納める段階で連番を刻んだ可能性も考えられます。

毛利家文庫には、嘉永六年（一八五三）十二月に右平次（喜平治）を葛飾砂村屋敷に派遣した折、守永弥右衛門その外は青海铸造場にて大砲铸造に取りかかっていた、という記録がみられます。このことから、この時期、青海铸造所でも大砲を铸造していたと推測されます。守永弥右衛門は、荻野流砲術家であり、吉田松陰の砲術の師といわれる人です。

ちなみに、嘉永六年（一八五三）一月、藩は郡司千左衛門に長崎で砲術の研究をさせ、彼の建言により、

試みに八〇ポンド・一二〇ポンドのフランス式大砲（ヘキサンス砲）を铸造することを許可しました。この時期、萩に来ていた守永弥右衛門が主張する六貫目炮烙玉砲と千左衛門の主張するヘキサンス砲について試みに铸造し、比較検討することを命じています。前述のように、守永弥右衛門等が青海の铸造所において大砲铸造に取り掛かっていたというのもこの頃です。

#### （四）砲尾のネジ

もつとも驚いたのは、喜平治の天保十五年砲の砲尾がネジになつており、しかもそれが取り外されて置かれていたことです。これは、アンヴァリッドの嘉永七年砲（一八ポンド砲）と最も大きな違いです。嘉永七年砲は、他の西洋式大砲と同様、砲尾にはネジが使われていません、さらには元目当もありません。

種子島に鉄砲が伝來したときに、ネジの作製にはじめて成功したことが、日本での鉄砲の独自製作に大きな役割を果たしたといわれています。ネジは、銃の筒の底を塞ぐ役割を持つとともに、時折、底にたまる火薬のカス抜きをする役割もあります。火薬のカスがたまると導火孔が詰まりし、連射した時に不発となつたり、命中率が低下したり、さらには爆発する危険が大きくなります。

和式大砲は、いわば種子島以来の和式鉄砲（マスケット銃、鳥銃）と同様の形態でもつて作られてきたことがあります。ただし、大砲（大筒）の場合、ネジが頻繁に開けられて、火薬のカス採りがなされたか

どうかは不明です。富蔵や長府博物館の喜平治の大砲に見られるように、砲尾の部分が砲籠によつてしつかり固定されている場合には頻繁にネジをはずすことは困難と思われます。バッカス氏等によれば、このような和式大砲のネジ構造と、中子（核、鉄棹）を通して砲腔をあらかじめ開けた形で鋳造する和式大砲の鋳造法とは、アジアの他の国にも例がなく、日本独特のものであり、非常に興味深いとのことです。

### （五）荻野流一貫目青銅砲

天保十五年砲は、長府博物館の展示にも見られるように「荻野流一貫目青銅砲」とも称されます。では、何故、荻野流一貫目青銅砲が相当数、製作されたのでしょうか。もちろん、これらの大砲は彦島の弟子待砲台に配備された「荻野流連城砲」の七門のうちに含まれたものとみられます。この砲台は、おもに荻野流砲術家達によって編成された荻野隊が守備していたようです。

長州藩では十八世紀後半から撫育制度を中心とした積極的財政改革の一環として、大筒・小筒（鉄砲）を中心とする新たな海外からの侵略に備えるために、水軍の演習と銃砲を積極的に取り入れた戦法の研究と演習を行つようになりました。藩の重臣村田清風等は、その兵制改革の一環として、大筒・小筒（鉄砲）を中心とする新たな銃陣を他藩に先駆けて考案し、これを「神器陣」（しんきじん）と名付けました。文化十四年（一八一七）には神器陣

の操練を萩の菊ヶ浜で行い、以後毎年その操練を行うようになりました。神器陣には、阪本（坂本）天山の天山流による機動性の高い砲架として有名な周発台（しゆはつだい）が改良工夫され取り入れられています。天山流はまた、荻野流増補新術とも称されるように、荻野流を基礎としています。喜平治（右平次）は、長筒周発台用具や五百目玉筒も造っていますので、このなかには当然神器陣・周発台用の大筒（忽砲）も含まれていたと思われます。しかし、一貫目玉砲はむしろ沿岸防衛用の要塞砲として造られたとみられます。

『萩市史』（第一巻）にもみられるように、天保十年（一八三九）から天保十四年にかけて六派七家（荻野・天山・隆安・筒習・種子島・円極の六派、山県・石川・湯浅・山崎・郡司・中村の七家）といわれる藩の主たる砲術家等によって、度々砲術演習がなされました。これには藩主もよく参觀し、おおいに士氣を高めました。とくに大組大筒打の郡司源太左衛門・源之允親子の指導のもとに陣地から離れた野砲だけでなく、異国船来襲に備えて陣地（台場）から撃つ陣地砲の演習がなされました。天保十四年（一八四三）ころから野砲よりも陣地砲が砲術練習の中心となつてきました。このように、一貫目玉砲はいわば神器陣とは別の、むしろ陣地砲ないし要塞砲として造られたと考えられます。

郡司の場合、讃岐信久以来、隆安（隆康）流を継承しながらも、代々、防長を訪れる多くの砲術家と技を競い、自流に拘ることなく他流を多く取り入れてきました。幕末期には西洋流大砲術をおもに研究し、その導入に務めますが、とくに喜平治や富蔵の鋳造所の場合、むしろ各流派の大砲の注文にも応えるために、他流派の鋳造技術（ハードウェア）も研究したと思われます。

前述のように、とくに嘉永六年（一八五三）以降は喜平治や千左衛門を中心に西洋式大砲の铸造が中心になります。天保十一年（一八四二）の高島秋帆による徳丸原での西洋流銃陣演習以降、藩でも源之允を中心にして西洋式大砲の铸造を目指しますが、天保十五年（一八四四）の時点ではまだ荻野流一貫目玉砲等が陣地砲（要塞砲）としておもに造られていましたと見てよいでしょう。

#### （六）王立大砲博物館とアームストロング砲

富蔵と喜平治の大砲について一通り見学し、撮影した後、その横のショーケースをテーブル代わりにして、ミーティングに入りました。パック氏からあらかじめ要望のあつた「長州藩の砲術と铸砲の發展」について説明しました。パック氏とカーラトン氏からは江戸時代の大砲铸造の絵巻物の複写を示されました。これはカナダの王立オントリオ博物館所蔵の絵巻物の複写であり、絵図とその説明が書かれていました。浮世絵を思わせる鮮やかな色使いには大変感心しました。この絵図について一通り拝見した後、これについて文書の解説と英訳を依頼されました。

この絵巻は、幕府鉄砲師棟梁<sup>あかがり</sup>定昌が嘉永四年（一八五二）から書き始め、嘉永六年（一八五三）十二月に書き終えたものです。嘉永六年といえば、ペリー提督の黒船が到来した年です。この絵巻に見られる大砲には、明らかにネジが用いられ、この時期まで幕府でも和式大砲をおもに造っていたことは驚きでした。

した。

パック氏からロタンダ展示場内外の展示物について、いろいろ説明していただきました。ここには、巨大なカノン砲や臼砲、ベル（釣り鐘）型の珍しい大砲だけでなく近代兵器も置かれています。さらに、麓の王立大砲博物館本部横の建物にはアームストロング砲等も多く展示されていました。アームストロング砲は、青銅製ではなく鋼鉄製であり、砲身の内部に螺旋形の溝が刻まれ、砲尾から弾丸を込めるようになっている後装（元込め）式です。

アームストロング砲は、一八六一年のロンドン万国博覧会において参加者とくに日本の遣欧使節一行に大きな影響を与えました。そして、薩英戦争および下関戦争の時（一八六三—一八六四年）に実戦に使われています。この大砲は、威力もありましたが、破裂することも多く、とくに薩英戦争における英艦隊の被害は、敵からの攻撃だけでなく、この新兵器の破裂によるものもあつたといわれます。

閉館になる午後五時前には、後ろ髪を引かれる思いで、王立大砲博物館前のウリッジ・アーセナル（兵器工場）の意味駅からキャノン・ストリート（大砲通り）の意味駅行きの電車に乗り、帰途につきました。

## 第五章 その後のロンドンの大砲

### (一) ロンドン再訪

かつて、パリの長州砲をめぐっては、下関市が返還運動を展開した結果、喜平治の天保十五年砲つまり萩野流一貫目青銅砲が長府藩主の甲冑と長期相互通貨との形で長府博物館に戻つてきました。その後、ロンドンの喜平治の大砲をめぐって、萩市が返還運動を展開しましたが、そのときは残念ながら成功しませんでした。

今回の訪問により、ロンドンに一門の長州砲が現存することがあらためて確認されました。しかも、この訪問に先立つ三月に、松村先生が王立大砲博物館を訪問された折に、バック氏からすでに「大砲の返還もしくは貸与」は可能かもしないという話があつたようです。松村先生はこの大砲の製作者名のみを頼りに、その関係者を捜そうとされたわけです。しかし、「なんたる偶然!」というべきでしょうか。同僚の外国语学部教授が松村先生の門下生であり、しかも四月の松村先生の研究会で喜平治と富蔵の銘のある大砲について話されたそうです。さつそく、筆者に連絡をいただきましたが、この話には大変驚きました。前述のように、「富蔵信成」こそは、まさに

筆者の父の曾祖父つまり高祖（曾々祖父）にあたるからです。

この「返還・貸与」の話は、すぐに「幕長研」幹事の森本文規氏（当時防長新聞秋支局長）と藤田洪太郎氏に伝えました。そして、最初の訪問の際にも、その可能性をバック氏に確認しました。

ここからの萩の皆さん行動は目を見張るものがありました。野村興兒市長のもと藤田・森本両幹事はじめ「幕長研」の有志メンバーを中心にいろいろ計画が練られていきました。そこでの方針は、民間交流を中心、相互に信頼関係を築いて交渉していくことで新たな局面を作り出し、全面返還ではなくても、相互貸与あるいは長期賃貸ないし一時貸与（里帰り）でも良いから実現に向けて活動しようということででした。

そこで、まずバック氏を萩に招待し、講演会あるいはシンポジウムを開くとともに、松本の鋳造所・反射炉・博物館等を視察してもらい、市民の大砲交渉に関する熱意を見て、ただくことになりました。丁度翌年の二月・三月に萩博物館と「幕長研」とは、幕末の科学技術について各種催事を行うことが予定されていましたので、この期間かその後の四月上旬に来ていただくよう王立大砲博物館に萩市からの招請状を代表の方が持参することになりました。

二〇〇五年十月末に、ドイツへの学会出張の途中、藤田・森本両氏につき添い、再度、王立大砲博物館を訪問しました。この折には、山口日英協会会長の池本和人先生（秋市医師会会长）が外務省に積極的に働きかけられ、在英日本大使館も協力していただきました。日本大使館は、ピカデリー・サーカス周辺の



王立兵器博物館本部にて  
右から森本氏・藤田氏・ハック氏・ヌーン氏・筆者（左端）



拓本をとる藤田・森本両氏

比較的閑静な場所にあります。その建物の中は一重二重のセキュリティ・システムが存在し、さすが「007 ジェームス・ボンドの国」の大使館と感心しました。午前中にそこを訪問し、広報文化センター長で参事官の水鳥真美氏および一等書記官大塚雅也氏にお会いし、藤田氏と森本氏から今回の王立大砲博物館の訪問についていろいろ相談がなされました。

大使館の水鳥・大塚の両氏の案内により博物館に連れて行ってもらいました。前回は、タクシーで行きましたが、運転士さんが道を迷い、その分の運賃について彼は受け取らなかつたのです。その心意気にはさすが有名なロンドンのタクシー・ドライバー、と感心したものですが、今回はその点、大変楽でした。また、王立大砲博物館の本部において同館統轄官のアイリーン・ヌーン氏が出迎えられ、そこで藤田・森本両氏より野村興兒萩市長からのバック氏の萩への招請状が手渡されました。ヌーン氏はロタンダの展示場にもバック氏とともに立ち会われました。このとき、藤田氏の願い出により、二つの長州砲について拓本がとられました。その申し出に博物館側は驚かれましたが、萩市サイドの熱意に非常に心を動かされたようでした。

このようにして、いよいよ民間交流の第一歩として、王立兵器博物館と萩市との民間交流がスタートすることになりました。ところが、途中、バック氏がリヴァプール国立博物館へ転出することになり、急ぎよ、招待者が王立大砲博物館理事マーク・スマミス氏に変更されることになりました。バック氏は早くから長州砲を含むアジアの大砲と西洋の大砲との製造技術との違いについて研究し、しかも長州砲の里帰りの

可能性を示唆した人です。藤田・森本両氏は是非ともパック氏も招請すべく、萩市や幕長研にも積極的に働きかけられ、スマス氏とともにパック氏も招待されることになったのです。

一〇〇六年四月八日には、萩博物館で国際シンポジウム『海を渡った長州砲—長州ファイブも学んだロンドンからの便り』が開催されました。その報告テーマとパネリストとは次のとおりです（敬称略）。

「オランダ・パリ・ロンドンの長州砲—海を渡った大砲」（郡司 健）

「日本・東アジア・西洋の大砲鋳造技術入門」（マシュー・パック）

「ウリッジと下関における長州砲、そしてロタンダへ」（松村 昌家）

「王立大砲博物館の歴史と一七八三—二〇〇六年のコレクション」（マーク・スマス）

日英共同シンポジウムということもあり、県内だけでなく、広島・福岡や大阪から多くの聴衆が参加され、大変熱気のこもった討論会となりました。

その後も野村市長・池本会長が、幾度か外務省へ足を運ばれ、高村正彦外務大臣のもと谷内正太郎事務次官・兼原信克総合外交政策課長から英國大使館のケラーム・フライ駐日英國大使（当時）へも働きかけられました。英國大使館の協力もあって、今回の里帰りが実現することになったのです。

また、萩の地元でも、「長州砲・萩里帰り事業実行委員会」（会長・野村興兒市長）を立ち上げられ、その一時貸与の高額資金の捻出についていろいろ検討され、「ワンコイントラスト委員会から格別なる配慮を受ける」等の積極的な運動を開催されました。民間の支援を受けて里帰りが具体化することになったのです。

です。

## (二) ファイアパワー「ドラゴン—東洋の大砲」展

一〇〇六年末には、古川薰氏の講演会（「わが長州砲流離譚」を書き終えて）が萩で開かれました。翌二〇〇七年正月一日早々、懐かしい長州砲に再会するためロンドンへ飛び、ユーロスターでパリ・アンヴァリッドも訪れました。

ロタンダにあつた二つの長州砲は、萩国際シンポジウム直前の二〇〇六年三月から、ウリッジ・アーチナル駅前の王立大砲博物館「ファイアパワー」本部前の東棟ギャラリーに移されていました。それは同博物館の企画展（「ドラゴン—東洋の大砲」）において展示されていたからです。この展示は当初半年間開催の予定でしたが、大変好評のためにさらに半年間延期されていたのでした。

展示会場では、他の東洋の大砲のなかでも特に日本の大砲コーナーが設けられ、富蔵と喜平治の大砲がならんで展示されていました。そして、それぞれ次のような説明文が付けられていました。

「大砲一一四八／日本の青銅八一二五ポンドカノン砲／郡司富蔵信成作 一八四四年／砲弾一貫（三・七五kg）／弾薬五百目（一・八七五kg）

再現された木製砲架に搭載。一八六四年に下関海峡を防衛する日本の砲台から英仏連合艦隊が没収。雲竜



王立大砲博物館ファイアパワーホーム



日本の大砲コーナーと二つの長州砲



紋が彫られている。」

「大砲一一四九／日本の青銅八・二五ポンドカノン砲／郡司喜平治信安作 一八四四年／砲弾一貫  
(三・七五kg／弾薬一五百目 (一・八七五kg)

一八六四年に一二一八四とともに没収。郡司家は十七世紀から周防・長門(長州)の著名な鋳物師であった。雲竜紋が彫られている。」

最初に訪れたときはその分類ブレートには製作者名は記載されていませんでした。いまでは「富蔵信成」と「喜平治信安」の名前が明記されているではありませんか。バック氏やスマス氏のお蔭で、もはや名も無き日本の大砲ではなくなつたのです。

その折に、前年末の講演会でお預りしていた古川氏の新著『わが長州砲流離譚』を王立大砲博物館のポール・エバンス氏にお渡しし、古川氏訪問当時の学芸員の方の消息についても詳しくお聞きすることができました。

一〇〇七年二月初めには、「幕長研」幹事の藤田氏と萩博物館研究員の道迫真吾氏が博物館の企画展の見学に訪れ、再度、長州砲の細部にわたる本格的な調査をされました。

勿論、この訪問によりマーク・スマス氏との友好を更に重ねることができたことは言うまでもありません。

## 第六章 海を渡つた大砲の意義

長州藩は下関戦争で手痛い敗北を喫しました。しかし、この戦争が長州藩の存亡をかけた戦いであり、結果的に欧米列強による領土侵略からわが国を守った戦争であったことも重大な事実です。長州砲は、このような長州藩の存亡をかけた戦いのシンボルであり、欧米列強による領土割譲をからうじて回避した下関戦争のシンボルであるということができます。そして、古川薰氏が「幕末長州藩の攘夷戦争」に書いておられるように「日本史が世界史に組み込まれる一瞬を目撃した物言わぬ証人」（一八四頁）でもあります。

各国に戦利品として没収されたことにより、若干の長州砲が、むしろ今日まで残されました。もし没収されていなければ、その後明治維新・日清・日露戦争、第二次世界大戦のいずれかの時点で供出させられ、鋳潰されたかもしれません。もちろん、海を渡つた大砲の多くは鋳潰され、別の青銅品に加工されてしましました。作品として特徴のあるものだけが、現在まで残されたものとみられます。

さらに、日本における大砲の構造と鋳造法は世界でもユニークな発展を遂げています。この点は、長い間、アジアと西洋の大砲の製造技術の歴史的な発展について研究されてきたバッック氏が非常に興味を示すところです。しかも、このような和式大砲は、江戸時代を通じて、長州藩の、とくに松本と青海の鋳造所

において製造されてきました。これは、江戸時代には鉄砲や大砲の製造が全面的に禁止されてきたという一般的常識に反するように思われるかもしれません。しかし、実は、江戸初期からさざらに中期にかけても、幕府は、対外政策つまりいわゆる鎖国政策を維持するために、長州藩や小倉藩・福岡藩などに対して外国船の打ち払いを命じていました。このようしたことから、江戸時代を通じて長州藩とくに萩本藩では二つの鋳造所を中心の大砲を造つていたのです。

その意味でも、二つの鋳造所の歴史的な産業考古学的遺産としての意義は他所にはないほど大きなものです。萩の町全体が歴史遺産といわれるよう、青海の鋳造所も手つかずのまま残っています。

ロンドンの二つの大砲のうち喜平治信安の大砲が里帰りすることになりました。最初の訪問時に、バッカさんが、「どうぞ、喜平治の大砲を叩いてみてください」といわれるのです。そこで、まず、ネジのはずされた砲尾を平手で一、三回、また砲口も同じように一、三回、叩いてみました。そうしたら、非常に澄んだ音がするのです。あたかも鼓を打つたときのような音色でした。非常に砲身の銅が練れている…といつた感じでした。富蔵の大砲も砲尾は砲匡で覆われていますが、砲口から同じように叩いてみました。こちらも良い音がしましたが、喜平治の大砲には及ばないとと思いました。「さすがに、喜平治さんは名人である」と実感した次第です。

二つの鋳造所では、大砲だけでなく、お寺の梵鐘（洪鐘・半鐘）、燈籠、仏像から、鍋釜鋤鉋といった日常用品まで造っていました。とくに良い音色を出し、しかもいくつても割れない梵鐘を造るには、

「鬆（巣）<sup>ナガ</sup>」といわれる空洞ができるないように銅や錫<sup>チタニウム</sup>を配合して溶解し、鋳型に铸<sup>ヒトツ</sup>込む必要があります。しかも、讃岐の三男喜兵衛信安が造った出雲大社の銅鳥居には、他所の青銅鳥居のように継ぎ目がありません。つまり、「铸<sup>ヒトツ</sup>継ぎ」法ではなく、「铸<sup>ヒトツ</sup>統け」法で造つたのです。これは、継ぎ目のない鳥居を造るようという第二代藩主毛利綱廣公の命により、喜兵衛が非常な工夫をして铸造したものです。この高い（長い）鳥居の柱をどのようにして铸<sup>ヒトツ</sup>継ぎたのか、今でも想像できません。このような「铸造・铸砲技術の集積」が、二つの铸造所においてその多くは口伝により一部は文書により伝承・工夫・開発されていったのでしよう。このことは、二つの铸造所で造られた萩の長州砲（Hagi Gun, Gunji Gun）の大きな特長といえます。

松本の铸造所は、道路工事に伴う発掘調査の後、現在は郡司铸造所遺構広場として移築保存されています。その大砲铸造石組遺構は当時の二四ポンド西洋式大砲の铸造を復元したもので、その場合の大砲铸造法も幕末当時の幕府や他藩における大砲铸造法（半分ずつの鋳型を納めた方形の箱を重ね合わせて一つの鋳型にするという半割り「形枠」箱による方法）とは異なる、長州藩独特の方法（円筒鋳型による方法）を残しており、非常に貴重な復元遺構となっています。

長州藩における大砲铸造法に関しては、「防長回天史」や、郡司铸造所遺構広場および萩博物館における展示説明文等を参照すれば、次のように要約されるでしょう。

「大砲铸造所では、三つのこしき炉を用いた大掛かりな铸造を行つていた。铸造にあたつては、一番下に尾部用の鋳型を置き、そのうえに円筒状の砲身の鋳型を三～四メートルの高さまで一〇段ほど積み上げる。その鋳型の外面には溝が刻まれ、この溝を利用して縄やタガ等でこの鋳型をしっかりと固定する。この鋳型の周りはその頂上部分までの高さの土手で囲まれている。この最も高い土手の三方にはふいご（鞴）炉がおかれて、そこでは銅が溶かされる。うえにおかれたその釜から、溶かした金属（銅液、錫液）が流し込まれる。高いところから銅溶液が流されることにより、銅のかす・芥、気泡などは上に浮き出さない。それにより、砲身には、時折傷跡が残るが、頑丈な作りとなり、八〇ポンドの巨砲も造ることができる。その铸造の想像図が示されていますが、これは西洋式青銅製カノン砲の制造を想定したものと見られます。

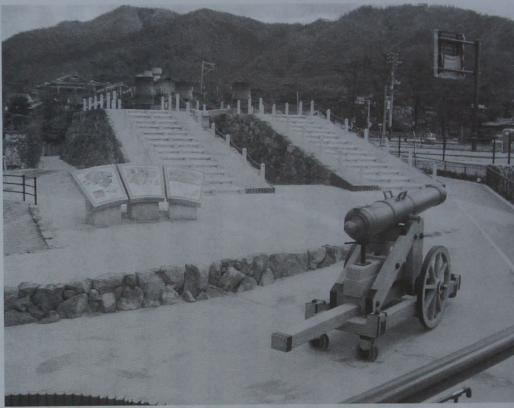
西洋式大砲を造るには、大掛かりな設備と巨額の資金が必要となります。これに対し、遺構広場の展示パネルからもうかがえるように、江戸時代における職人の技によって伝統的な設備と機材を用いて巨砲の制造をも可能にしたわけです。このような江戸のもの造りの伝統技術こそが、明治以後の近代技術の迅速な移入を可能にしたことも否定できません。それはたんに後の向きのいわば過去懷古的な意味ではなく、今後の日本の進むべき道（「もの作り立国」・地域振興等）を考えるうえにも役立ちます。

## おわりに

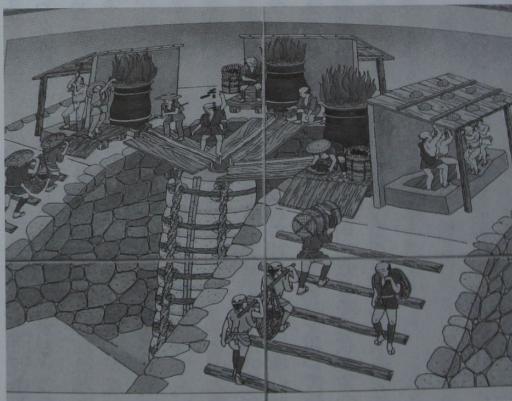
下関戦争の結果、海を渡った長州砲を訪ねて、オランダ、パリ、ロンドンを探訪しました。長州砲に出会うたびに、毎回、感動し、そこを立ち去りがたいものがありました。そして、最後に、直接の先祖である富蔵信成の大砲に出会えたことは、最も大きな喜びでした。

永年、長州砲を探求してこられた古川薰氏の情熱とご尽力には今更ながら敬服し感謝の念でいっぱいです。そして、この度は、野村興兒市長や「幕長研」の皆さんをはじめ萩市の皆さんとのめざましい運動のお蔭で、喜平治（右平次）信安の大砲が里帰りすることになりました。まことに嬉しい限りです。

富蔵の大砲も、喜平治の大砲が再びロンドンに戻ってきた時に、懐かしい郷里、萩の話を聞けることを今から楽しみにしていることでしょう。

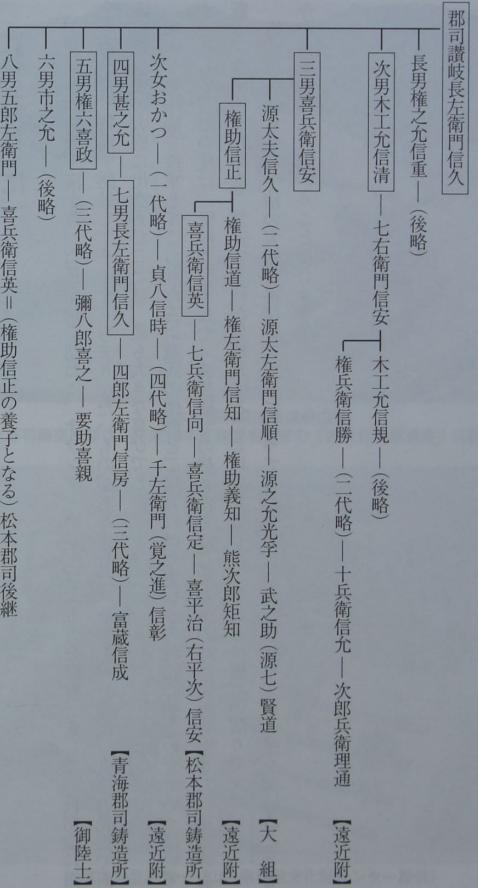


松本の郡司鋳造所遺構広場  
(郡司鋳造所跡は、平成19年度経済産業省の「近代化産業遺産」に認定)

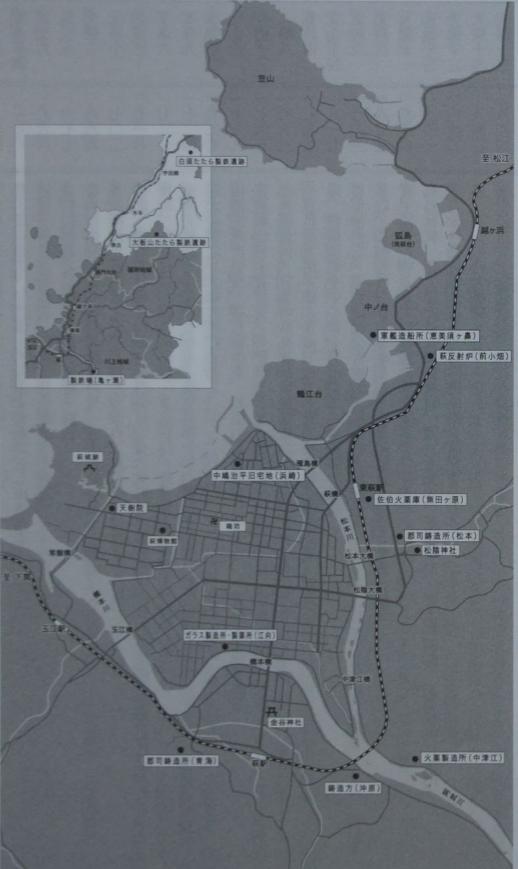


遺構広場展示物一（山口県埋蔵文化財センター提供）

郡司家略系図



## 幕末萩の産業遺跡分布図



注) 萩博物館「幕末長州藩の科学技術－大砲づくりに挑んだ男たち－」2006年



【主要参考文献】

- ILN (The Illustrated London News), December 24, 1864.  
宇田川武久「鉄砲と戦国合戦」吉川弘文館、二〇〇一年。  
清水唯夫「攘夷戦長州砲始末 大砲バリから帰る」東秀出版、  
一九八四年。  
郡司信順「源太左衛門」「御筒数」一八〇八(文化五)年(山口県文書館所蔵)。  
郡司健「オランダとパリのカノン紀行 海を渡つた大砲を訪ねて」[大阪学院大学通信]第三十七卷第三号、二〇〇六年。  
郡司健「萩大砲鋳造所遺構と江戸期の大砲技術の伝承」近畿産業考古学会、二〇〇六年度年次大会 講演論文集、二〇〇六年。  
郡司健「ロンドンのカノン紀行—ならびに江戸期の大砲術について」[大阪学院大学通信]第三十七卷十二号、二〇〇七年。  
郡司健編「国際シンポジウム報告書 海を渡つた長州砲」長州ファイブも学んだロンドンからの便り、ダイテック、二〇〇七年。  
郡司健「和式大砲の鋳造法 江戸のものづくり、伝統技術考」[大阪学院大学通信]第三十九卷五号、二〇〇八年。  
坂田精一訳「アーネスト・サトウ 一外交官の見た明治維新(上)」岩波文庫、一九六〇年。  
司馬達太郎「世に棲む日々(二) 文春文庫、一九七五年。
- 末松謙澄「修訂防長回天史 上・下」柏書房、一九六七年。  
道迫真吾「大砲鋳造石組遺構」の移築復元整備について、萩博物館「幕末長州藩の科学技術 大砲づくりに挑んだ男たち」二〇〇六年。  
中本静曉「郡司喜平治作『萩野流賣賣目青銅砲』の要目について」幕末長州科学技術史研究会「長州の科学技術－近代化への軌跡」第一号、二〇〇四年。  
萩市史編纂委員会編「萩市史 第一巻」萩市、一九八三年。  
萩博物館「幕末長州藩の科学技術 大砲づくりに挑んだ男たち」二〇〇六年。  
広瀬富編「吉田松陰書簡集」岩波書店、一九三七年。  
古川薰「幕末長州藩の攘夷戦争－歐米連合艦隊の来襲」中公新書、一九九六年。  
古川薰「わが長州砲流離譚」毎日新聞社、二〇〇六年。  
細川潤次郎(編集総裁)他編「古事類苑 武技部」神宮司廳、一九〇〇年。  
毛利家文庫「諸記録綴込」三十二部寄、三十一の六、一八五〇一年、三十六頁。  
四(安政元)年一月。  
山本勉彌「河野通穀『防長ニ於ケル郡司一族ノ業績』藤川書店、一九三五年。

(付記) 本稿をまとめるにあたり、次の方々ならびに各機関からは貴重な資料を賜り、写真撮影等にご快諾・ご協力いただきました。このことに心から厚くお礼申しあげます。オランダ人ジャーナリストマルセル・レメンズ氏夫妻、デンヘルダー海軍博物館(レオン・ホンブルク学芸員)、アムステルダム国立博物館(セント・ニコラス学芸員)、アンヴァリッド軍事博物館、オルレアン大学アラン・フルーリ教授、大手前大学松村昌家名誉教授(元同志社大学・神戸女子学院大学教授)、王立大砲博物館(アイリーン・スーン統轄官)、マーク・スマス理事、マシュー・バッカ元研究員、ポール・エバンス研究員、ヴィクトリア&アルバート博物館(ネイル・カールトン研究員)、駐英日本大使館(水島真美参事官、大塚雅也一等書記官)、山口日英協会(池本和人会長)、萩博物館(高木正臣館長、樋口尚樹副館長、道迫真吾研究員)、長府博物館(古城春樹学芸員)、大昭院(清水空菴院主)。

また、野村興兒市長をはじめ萩市の皆様、ならびに幕末長州科学技術史研究会(樹下明紀会長、藤田洪太郎・森本文規両幹事)の皆様には一方ならずお世話になりました。あらためて心から厚くお礼申しあげます。

## 萩を知ろう！萩を楽しもう！萩を伝えよう！

### ■シリーズ「萩ものがたり」既刊タイトル

タイトル名	著者	定価
①萩の椿	吉松 茂	600円
②高杉晋作100問100答	一坂 太郎	500円
③萩開府一毛利輝元の決断	北村 知紀	600円
④萩まちじゅう博物館	西山 徳明	600円
⑤松陰先生のことばー今に伝わる志	萩市立明倫小学校(監修)	500円
⑥密航留学生「長州ファイブ」を追って	宮地 ゆう	600円
⑦萩と日露戦争	一坂 太郎	500円
⑧萩の巨樹・古木	草野 隆司	600円
⑨吉田松陰と現代	加藤 周一	600円
⑩萩沖の魚たち(春・夏編)	中澤さかな／堀 成夫	600円
⑪萩の史碑	一坂 太郎	500円
⑫山田頼義—治法國家への歩み	秋山 香乃	600円
特別編 ますらをたつの旅【長州ファイブ物語】	一坂 太郎	1300円
⑬川柳中興の祖ー井上剣花坊	大庭 政雄(監修)	600円
⑭高島北海 HOKKAI 萩とナンシー	高樹 のぶ子	600円
⑮桂小五郎	一坂 太郎	500円
⑯萩沖の魚たち(秋・冬編)	中澤さかな／堀 成夫	600円
⑰若き日の伊藤博文	一坂 太郎	600円
⑱宮本常一が見た萩	中澤さかな	600円
⑲海を渡った長州砲ーロンドンの大砲、萩に帰るー	郡司 健	600円
⑳萩往還を歩く	中澤さかな	600円

販売所／萩博物館・萩市観光協会・明屋書店・道の駅・市内のホテル旅館・萩市役所受付など  
※郵送でのご購入は、萩ものがたり事務局まで電話・FAX・Eメールでお申込みください。

### 萩ものがたりは、定期購読ができます。

年会費2,000円にて、年間4タイトル(4・10月発行)を定期配本。

\* 定価割引の特典があり、確実にお手元に、送料は無料！

お申し込み方法 ハガキ・FAXでの申込み、住所、氏名、電話番号をご記入ください。

電話・インターネットでの申込みもお受けします。

会費のお支払い方法 申込みと一緒に郵便振替用紙をお届けします。

銀行からの口座引き落しもできます。



有限責任 萩ものがたり  
中間法人

〒758-8555 山口県萩市大字江向510番地

TEL 0838-25-3233 FAX 0838-26-5458

<http://www.city.hagi.yamaguchi.jp/portal/book/booklet.html>

E-mail story@city.hagi.yamaguchi.jp

落丁本・乱丁本は発行所宛にお送り下さい。送料発行所負担にてお取り替えいたします。

### 刊行のことば

山口県萩市は、本州西端に位置し日本海に面します。江戸時代は毛利三十六万石の城下町として栄えました。幕末には吉田松陰をはじめ多くの逸材を輩出した了明治維新始動の地として知られています。

このようなことから全国に例をみない近世の都市遺産、明治維新関係史跡や史料、近代日本の礎を築いた多くの人物に加え、北長門海岸国定公園の自然、美など「宝物」ともいうべき資源に恵まれています。

しかしながら、明治維新は風化しつつあると言われるよう、かつては萩に伝承されてきた物語などが消えつつあります。

毛利輝元が安芸の国(広島県西部)から萩の地に移封され、開府してから、平成十六年(2004)は四百年の節目となります。

そこでこれを機に、萩に残る厚みのある歴史文化・人物、豊かな自然、多彩な行事や風物、民間伝承、伝統産業など、後世に語り継ぐべき萩のすべてをブックレット・シリーズ「萩ものがたり」として定期的に刊行し、後世に伝承するとともに、全国に向け発信することとしました。

読者の皆様が、この小冊子を活用され、萩の素晴らしさを楽しみ、理解する一助となるよう願ってやみません。

1000TH

### 〈著者紹介〉

郡司 健



一九四七年山口県生まれ。

現在 大阪学院大学人文学部情報報

部・大阪学院大学人文学部情報報

書系講師・大阪学院大学人文学部情報報

一九四七年山口県生まれ。  
現在 大阪学院大学人文学部情報報

書系講師・大阪学院大学人文学部情報報

定価 600円（本体571円+消費税29円）

一八六三・一八六四年に長州藩はイギリス・オランダ・フランス・アメリカの四か国の艦隊と下関で攘夷戦争を開戦しました（下関戦争）。その敗北の結果、長州藩の大砲（長州砲）の大半が四か国に没収されます。その長州砲を巡ってオランダ・パリ・ロンドンを訪ねました。そして、ロンドンの大砲がついに一四年ぶりに萩に里帰りすることになりました。この長州砲には、過去の歴史的な意味だけでなく、現在さらに将来的にも重要な意味があります。



王立大砲博物館正面（ウリッジ・アーセナル）

萩市立萩図書館



111429056



Vol.19  
海を渡った長州砲—ロンドンの大砲、萩に帰る—

2008年10月1日 第1刷発行

著者 郡司 健

発行者 野村興兒

発行所 有限責任中間法人 萩ものがたり

印 刷 有限会社マシヤマ印刷